

# 陽気遊山の世界づくり

— 高野友治の世界 —

右の絵は、フランスの学者ミシェル・フーコーの著書『言葉と物』の巻頭に飾られてあるもので、スペインの画家ベラスケスの「侍女たち」と題されたものです。フーコーはこの絵の主体は中央の王女やその周辺の人々ではなく、画面中央の絵に描かれている国王夫妻が画面に相對しており、その二人こそこの絵の主体なのだとし、「見えているもの、また現実が存在しているものの主体は、現実が見つめているものなのであって、現実の中にないのだと論」じているそうです。

高野友治氏は、以上の説明をしてから、「教祖のお話の主体は、「よふきゆさん」の世界づくりに心を向け、その実践にはげんでくれ、というところにあつた」とし、教祖の話にしても「お話の中に主体があるのでなくて、お話がその人の心の中にはいい、その人が、そのお話によって、その人の方向が神の方を向いて行く、そこに主体がある」と、飯田岩治郎の例を出して、「前生のおじさん」とか「水のさづけ」「人足社」というのも「この話の主体は、世界たすけのために、はたらいて下されや、ということにあつたと思う」と結んでいます。

高野氏は、14歳でおぢばに来て、93歳で亡くなるまで、生涯天理教史の研究に励み、多数の著作を残されました。

今月は天理大学退職後に、私家版として52号まで発行した『創象』を主に、同氏の教祖観を見ていきます。



## 主体は表現の外にある

**教祖のお話の主体は、「よふきゆさん」の世界づくりに心に向け、その実践にはげんでくれ、というところにあっただと思う。** / そして、そのことを教祖はいつもお話になっていたと思う。 / あるいは、口にされなかったかもしれない。教祖は、信者たちに、どうせいこうせいと、命令がましい事は、おっしゃられなかった。信者が自分の心の中で、やがて、成程と得心のいくであろうようなお話のしかたをなされたように、昔の先生方から聞いている。 / あるいは、いんねんのお話もあったようにお聞をした。 / あるいは、生れかわりのお話もあったようにお聞した。 / だが、**それはお話の主体ではなく、お話の主体をとらせるための媒体ではなかったか。**

今年の六月死去したフランスの学者ミシェル・フーコーの著書『言葉と物』の巻頭に飾られてある一葉の絵を思い出す。スペインの画家ベラスケスの「侍女たち」という絵である。画面の中央に王女がいて、その侍女たちや、お守役の老婦、それに画面の左に大きい画布の裏側が見え、その画布の向うに画家が、筆を持ちキャンバスをもってこちらを向いている。画面の中央に、国王と後の絵が掛けてある。その右側の、向うが抜けている出口に、一人の護衛の男が立っている。 / フーコーはこの絵を論じて、この絵の主体は誰かといっている。王女のように思えるが、侍女たちはこちらを向いている。画家もこちらを向いている。主体は王女でも侍女でも、画家でもない、画面の人々が向いている画面の外はこちらに主体があるのだ、と彼は論じる。それは誰か。 / それは国王夫妻であって、画面の中の人々と相対して立っているのだ。 / それが中央の国王夫妻の絵、実は鏡に映る姿となって表現されてあるのだ、と論じている。 / 結局、フーコーが、言おうとしているのは、一枚の絵にしても、世の中の出来事にしても、**見えているもの、また現実が存在しているものの主体は、現実が見つけているものなのであって、現実の中にないだと論ずる**のである。

教祖のお話にしても、**お話の中に主体があるのでなくて、お話がその人の心の中にはいい、その人が、そのお話によって、その人の方向が神の方を向いて行く、そこに主体があるように思う**のである。 / 教祖がある少年のおたすけに行かれたとき、その枕もとに坐わり、 / 「おゝなつかしや、前生のおじさん」 / といわれたという。 / それは、人間はすべて深いつながりをもったものであって、他人というものはないもの、みな恩人と思って相対すべきであることをお教え下されたものと思う。 / また水のさづけをお渡しになったという。 / それは、大地から湧きいづる泉のごとく、人に施し、人から喜んでもらってくれ、という意味だと思う。 / また後には人足社の理をお渡しになったという。それは、神の手足となって働いてくれよという意味だったと思う。 / 神さまから、生涯安堵のお墨付をいただいたのではないと思う。

今になって考えてみると、このお話は、ベラスケスの「侍女たち」の絵のように、この話の中には、話の主体がないのだ。**この話の主体は、世界たすけのために、はたらいて下されや、ということにあっただと思う。** / 教祖のお話には、この種のお話が多いと思う。(『創象』26号P2.1984.高野友治)

見えているものとしての絵



発せられた言葉にとらわれていては、  
教祖が言いたいことは分からない

高野氏は、フーコーによる「侍女たち」という絵の解説をもとに、教祖が発せられた言葉の意味を、「世界たすけのために、はたらいて下されや」という事につなげていきます。この説明の中に、高野氏の「教祖—神」観が簡潔に示されているように思います。

実際に発せられた(伝承されている)言葉—現実

- ①「おなつかしや、前生のおじさん」
- ②「水のさづけ」
- ③「人足社」

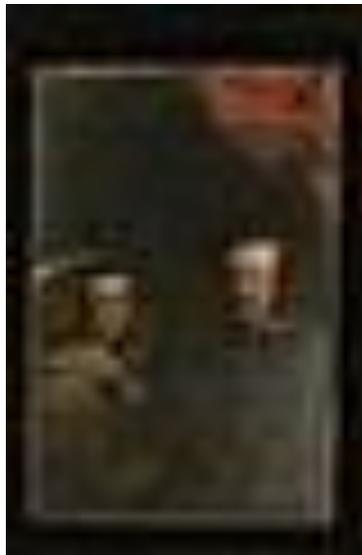


主体(教祖の思い)

現実 😊

主体

絵



見えているもの、また現実に存在しているものの主体は、現実が見つめているものなのであって、現実の中にな

お話の中に主体があるのでなくて、お話がその人の心の中にはいい、その人が、そのお話によって、その人の方向が神の方を向いて行く、そこに主体がある

- ①他人というものは無いもの、みな恩人と思って相対すべき
  - ②大地から湧きいづる泉のごとく、人に施し、人から喜んでもらって、くれ、という意味
  - ③神の手足となって働いてくれよ、という意味
- 《世界たすけのために、はたらいて下されや》

教祖の教えの「主体」は「おふでさき」と「みかぐらうた」の中で表現されている

そして、高野氏が示される《世界たすけのために、はたらいて下されや》の例としての3点、

- ①他人というものはないもの、みな恩人と思って相対すべき
- ②大地から湧きいづる泉のごとく、人に施し、人から喜んでもらってくれ、という意味
- ③神の手足となって働いてくれよという意味は、「おふでさき」「みかぐらうた」のなかで明確に示されています。

①

13号

43. せかいぢういちれつわみなきよたいや **たにんとゆうわさらにないぞ**や  
44. このもとをしりたるものハないのでな それが月日のざねんばかりや  
45. 高山にくらしているもたにそこに くらしているも**をなしたまひい**  
46. それよりもたん／＼つかうどふぐわな みな月日よりかしものなるぞ  
47. それしらすみなにんけんの心でわ なんとたかびくあるとをもふて

②

一下り目

三ニ **さんざいころをさだめ** (散財心を定め)

四ツ よのなか

(大和方言で「よんなか」=五穀豊穡)

五ツ リをふく

(理を吹く)

六ツ むしやうにでけまわす

(いたるところ、豊年満作になる)

③

6号

57. しんぢつに月日の心をもうにわ **めへ／＼のやしろもろた事なら**  
58. それよりもぢうよぢざいにいつなりと をもうまゝなるはなしゝよもの  
59. いまゝでも月日のやしろしいかりと もろてあれどもいづみいたなり

## 『御存命の頃』連載、及び出版の意義

高野氏の代表作は昭和11年に初版が出た『御存命の頃』です。内容は版によりかなり異なりますが、5回出版されています。初版は同氏が天理外国語学校を卒業し、すぐ道友社の記者となって、古老の方々取材して書かれた「天理時報」の記事をまとめたものです。この記事連載中には、その内容について「その誤謬であること、その無責任なる事、将又語る人の当を得てゐない事等の非難」があったようですが、当時の管長中山正善氏と道友社の編集部が防波堤になってブロックされ、高野氏は自由に書き続けることが出来たようです。

それゆえか、初版の序として中山正善氏は「高野君は屑屋の役割をつとめた様なもので」「その資料から役にたつものとたゞぬものとを撰りわけるのは、この資料を利用する人の仕事である」と書いています。

初版の原稿が書かれた昭和7～11(1932～1936)年は、教祖没後ほぼ50年で、明治元年に生まれた人が70歳になろうとしています。教祖存命時代を知る人に直接聞くことが出来る最後の時期でした。この時代、教内ではすでに『おふでさき註釈』があり、教祖伝の大筋は決定していました。その時点で、学校を卒業したばかりで、教内事情にも疎い青年が古老から昔話を聞くということは、「教祖伝」の大筋から外れる話もあるかもしれず、また、教祖亡き後の話を教祖の話として語ることも考えられます。そういった意味で、高野氏の仕事は教内からいろいろな意見を受けることになったのだと思われま

## 高野友治氏 略歴

1909	(明治42)	年	7月11日、新潟県、現在の加茂市で生まれる
1923	(大正12)	年	8月29日、おぢばへ
1924	(大正13)	年	4月、天理中学校入学
1929	(昭和4)	年	4月、天理外国語学校入学
1932	(昭和7)	年	4月、天理教道友社編集部勤務
1936	(昭和11)	年	『御存命の頃』
1937	(昭和12)	年	結婚(28歳)
1938	(昭和13)	年	天理教本科勤務(講師)
1946	(昭和21)	年	『伝道者一片山好造伝』
1947～8	(昭和22～23)	年	『改版御存命の頃』(全3冊)
1948	(昭和23)	年	天理大学(天理教学担当)助教授(39歳)
1949	(昭和24)	年	『火蓋』1952(昭和27)年 『先人素描』
1954	(昭和29)	年	『天理教伝道史①』～1975年『天理教伝道史⑩』
1957	(昭和32)	年	『花の中の住い』
1958	(昭和33)	年	天理大学教授(49歳)
1962	(昭和37)	年	『天理教史参考年表』1964(昭和39)年『だいくのにん』
1970	(昭和45)	年	3月、定年退職(60歳)(以後十年間非常勤講師)
1971	(昭和46)	年	『改修版御存命の頃』(全2冊)
1978	(昭和53)	年	10月から1998年8月まで、『創象』52号と『艸象』12号
1979	(昭和54)	年	10月から1981年1月、『高野友治著作集』六巻と別巻一
1980	(昭和55)	年	『御存命の頃.新版』(著作集第1巻として)
1982	(昭和57)	年	天理大学名誉教授(73歳)
1982	(昭和57)	年	『清水与之助伝考』
2001	(平成13)	年	1月5日、『御存命の頃』(改修版復刊)五回目の出版
2003	(平成15)	年	2月3日、出直す(93歳)

(『教祖余話』P467.高野友治.高野眞幸編.私家版.2012)をもとに一部補足

## 屑屋－昭和年代の古老が話した昔物語りを高野君があつめたのだ

この「序」は当時のそのような状況をふまえて、まだ32歳の中山正善氏が、さらに若い28歳の高野氏の著作を出版するに際し、教団幹部の先生方を納得させるためにどうしても必要なものであったのだろうと推測します。

教祖様御誕生以来、既に百四十年ばかりたつてゐる今日、今年百歳の古老ですら教祖様の四十歳前後に生れたに過ぎない。八、九十歳の古老であれば、漸くかすかなる己が幼心に映じた明治前後の様を語り得るものである。それ以前の事は論なく古老の父母により語られしものを、一次的中継するものである。

又、古老なるものはその長い年月の間に於て後世捏造されたと思ふことですら、聞くこと度重なれば、己が経験した見聞であるかの如く思ひ誤ることがないとはいへない。かゝる实例は自分も度々経験した事で、数年前は否定した業績を数年後には己が経験した事実かの如く、同一人より話された事である。而してその矛盾を指摘するとも／『さうかいな』／と軽く答へて、とりつく島なき思ひをした経験をもつてゐる。古老の話とは得てして左様な危険を多分に含んでゐるものである。いはんや、年代に於て一、二年前後してゐる位の事は頻出するものと考へざるを得ない。

されば高野君の蒐集に於ても、ほんとの見聞談と、古老の父母より聞いた話と、而してその後捏造された流説とが混同されてゐる事であらうから、その話が直ちに歴史的事実と断ずる事は出来なからうし、又、並列されてゐる古老の話にも相違してゐる所もあらうと思ふ。併し乍ら昭和年代の古老が話した昔物語りを高野君があつめたのだとの点は、確かであつて、この意味に於て後世同志への標準を示したものといへる。

天理時報へ連載された時々、その誤謬であること、その無責任なる事、将又語る人の当を得てゐない事等の非難を耳にした。中には尤もと思はれる所もあつた。しかしこれを以て直ちに歴史的事実と断ずるが故に生ずる不平不満が多い様である。が、前述のやうに昭和の古老はかゝる事物語りりと、単なるお伽話に近いものと解釈するときは、真向から訂正申込みするのも大人げない事とさとれるだらう。事実と思へば腹がたつといふやうな人は、高野君の聞いたお伽噺ぢや、昭和古老の昔話ぢやと思へばよいではないか。高野君は屑屋の役割をつとめた様なものである。君があつめた復古を丹念に一枚々々皺をのばした。火のしをかけた。而してほっておけばそのまゝ亡んで了ふにきまつてゐた記事を誰にも読める様に、皆さん見て下さい、と陳べた様なものだ。復古紙の中から資料をひろひ出したまでである。その資料から役にたつものとたゝぬものとを撰りわけるのは、この資料を利用する人の仕事である。（『御存命の頃』序、中山正善、1935－（引用は『改修版御存命の頃』（1971）より）

## 「古老」の話の真偽―「三十二ヶ所の打ちあけ場所」について

下の文は、文久元年に生まれ教祖が身を隠された明治20年には27歳だった高井直吉氏の話で、『御存命の頃』ではなく、『創象』17号に記されているものです。「『かんろふだいへ行ってお願いしなさい、私はここで添え願いをしています』とおっしゃった」のは教祖であり、「三十二ヶ所の打ちあけ場所、それも内、中、外とある。その打ちあけ場所をめぐって、甘露台へお詣りすれば、どんな病人もたすけてくださる。」と語ったのは直吉氏ですが、その前に教祖の言葉があるので、三十二ヶ所…の部分も教祖の話のように受け取れます。ここでは「三十二」ですが、「おふでさき」2-16の『註釈』に「うちわけばしよとは、打ち分け場所で、将来は内、中、外に各々三十一カ所宛、都合九十三カ所出来ると仰せられた」とあるので、この文はその傍証のようにもなります。ここでは、「古老の話の真偽」の一例として、『おふでさき』解釈としても重要な位置にある「三十一カ所」の話を集めてみました。現行の註釈がどのような経緯で出来たのかは、個々読まれた方が考えてみてください。

教祖の時代、たすけの主体は教祖だった。教祖がたすけて下された。教祖のお側へいくと、痛みがとまり、苦しみが癒えた。息を吹きかけて下されたとか、腫物の膿に、つばつけてなおして下された話もあるが、祈祷とかまじないをなされた話はきかない。教祖が神さまだった。神のやしろであった。

明治八年、かんろふだいのぢばが定まるとともに、かんろふだいのぢばにお願いしてたすかったという例が増えている。／ かんろふだいのぢばは、人間のはじめだしの所、親神のおいでになるところ、その地点に願うことによって、親神さまからたすけていただくという信仰を教えられたものと思う。私のお聞きした話では、教祖は、明治十五年の甘露台石の没収の後、明治十六年に御休息所にお移りになり、そのころには、よく「かんろふだいへ行ってお願いしなさい、私はここで添え願いをしています」とおっしゃったという。／ たすけを下される対象を、教祖御自身からぢばにお移しになったように思う。／ そのころから、否、もっと前から、ぢばこそおたすけの本源という信仰が、信者の心の中に広まったように思う。／ 「甘露台は、肝腎要の命の継ぎ場所の甘露台や」／ と高井直吉〈※1861(文久1)－1941(昭和16)〉は話していた。

**「三十二ヶ所の打ちあけ場所、それも内、中、外とある。その打ちあけ場所をめぐって、甘露台へお詣りすれば、どんな病人もたすけてくださる。」**／と語っていた。／ 甘露台は、人間をはじめ出した証拠だといわれる。たすけの本源なのである。(『創象』17号P3. 高野友治. 1983)

「神のうちわけばしよ」  
解釈の変遷

「おふできき」2-16の『註釈』で「内、中、外に各々三十一カ所宛」の内容が入るのは昭和12年版からで、昭和3年版には「ぢば以外に此の教えを説き神の救いを取次ぐ場所の出来るのを急ぐ」とあるのみです。「三十一カ所・・・」の話は昭和3年以前から教内にあったのですが、どういうわけか、昭和3年版では採用されませんでした。

2号15. [このみちをしんぢつをもう事ならば むねのうちよりよろづしやんせ]

16. [このはなしなんの事やとをもっている 神のうちわけばしよせきこむ]

【**現行註釈**】⇒今論した話の真意は、何処にあると思う、それは国々所々に打ち分け場所の出来るのを急ぐのである。

註 うちわけばしよとは、打ち分け場所で、将来は内、中、外に各々三十一カ所宛、都合九十三カ所出来ると仰せられた。如何に難病の者でも、その打ち分け場所を回っているうちに、病気を救けて頂くのであるが、そのうち一カ所は非常に辺鄙な所にある。しかし、これを略するようでは救からない。又、たとい途中で救かっても、車つえを捨てないで、結構に救けて頂いた事を人々に知らせて、最後にそれをおぢばに納めるので、もし途中でそれを捨てたならば、一旦救けて頂いても、又元通りになる、と仰せられた。

【**昭和3年版註釈**】⇒ 今論した話の真意は、何処にあると思ふ、それはぢば以外に此の教えを説き神の救いを取次ぐ場所の出来るのを急ぐのである。 〈註〉 「うちわけばしよ」は、ぢばの理をうちわける場所である。

【**昭和12年版註釈**】⇒今論した話の真意は、何処にあると思う、それは国々所々にぢばの理を取次ぐ場所の出来るのを急ぐのである。

註 うちわけばしよとは、**ぢばの理**を打分ける場所で、将来は内、中、外に各々三十一カ所宛、都合九十三カ所出来ると仰せられた。如何に**業病**の者でも、その打ち分け場所を回っているうちに、病気を助けて頂くのであるが、そのうち一カ所は非常に辺鄙な所にある。而(しか)し、これを略すようでは助からない。又、假令途中で助かっても、**躰(いざり)は車を、盲者は杖(つえ)**を捨てないで、結構に助けて頂いた事を人々に知らせて、最後にそれをおぢばお屋敷に納めるので、もし途中でそれを捨てたならば、一旦助けて頂いても、又元通りになる、と仰せられた。

(※ポップ体は現行版では削除、あるいは表現が変えられた部分、それ以外は現行版、12年版はほぼ同じ。)

慶応3年につとめ場所に神道式祭式が祀られたことで、それまで教祖の話の場であったところが神道になってしまい、教祖が話し場所がなくなっていました。そこで、教祖の話す場所が欲しいといったのが、「神のうちわけばしよせきこむ」というお歌です。「おふでさき」1, 2号のテーマである「やしきのそうじ」が「おちゑを追い出すこと」になっているので、この本来の意味が分からなくなってしまったのです。ですから、教祖の話をちば以外で取り次ぐ場所が93カ所出来るというのは、教祖が亡くなった後の創作だというのが私の意見です。

明治7年の暮れには慶応3年からつとめ場所に祀られていた神道式祭式は没収されてなくなりました。それは「おふでさき3号」2, 3にある「そうじ」が実行されたということでもあります。

神道は慶応3年12月9日の「王政復古」によって、「王政復古＝神武創業の初めにに基づき、諸事を一新し、『祭政一致』の制度に回復するため」の道具になったのです。3号に先立つ1号、2号は明治2年に書かれています。すでに吉田神祇管領はその役割を終え、政府の一機関である神祇官がすべての神道を管轄することになっていました。当然お屋敷の中にある神道式祭式の意味も変わっていきます。それは教祖の教えとは相反するものであったのではないのでしょうか。

1号、2号のテーマは「やしきのそふじ」です。

1-29. このたびハやしきのそふじすきやかに  
したゝてみせるこれをみてくれ

2-18. なにゝても神のゆう事しかときけ  
やしきのそふぢでけた事なら

とあります。明治6年暮れ以降の教祖の動きを見る時、すでにその問題意識は明治2年の段階でもあったと考えられます。そのような視点から「おふでさき2号」を読むとどのような解釈が生まれるのでしょうか。

13. はや／＼とをもてでよふとをもへども  
みちがのふてハでるにでられん
14. このみちをはやくつけよとをもへども  
ほかなるところでつけるところなし
15. このみちをしんぢつをもう事ならば  
むねのうちよりよろづしやんせ
16. このはなしなんの事やとをもっている  
神のうちわけばしよせきこむ
17. このみちが一寸みゑかけた事ならば  
せかいの心みないさみてる
18. なにゝても神のゆう事しかときけ  
やしきのそふぢでけた事なら



『天理教事典第三版』は、「三十一カ所」の記述が昭和3年版にはないこと、それは昭和12年版から挿入されたことについて、明示していません。「昭和27年・45年改訂版・平成7年改訂版」と戦後の改訂時期をこまかく示しているのは、「昭和12年版」の存在を故意に隠そうとしているようにも思われます。

また、「教祖(おやさま)がこの言葉を説明するのに、当時一般に見られた霊場巡拝をたとえに引いて説明されたものであろう」と教祖の教えの中にあつたことを推定させる言葉が入っています。ただ、教会の設立は明治21年以降であることにも触れ、「後者が『打ち分け場所』の理を受け継ぐとも悟れる」と明治2年に書かれた「おふでさき」に教会の要素があることについて、疑念があるとも受け取れる表現になっています。

打ち分け場所 うちわけばしよ 「おふでさき」の用語。

このはなしなんの事やとをもてい 神のうちわけばしよせきこむ (ふ2:16)

『おふでさき註釈』によれば、[打ち分け場所] (昭和27年・45年改訂版・平成7年改訂版)、「ぢばの理をうちわける場所」(昭和3年版)と言われる。さらに『おふでさき註釈』において、「将来は内、中、外に各々三十一カ所宛、都合九十三カ所出来ると仰せられた」と注記されているが、これは教祖(おやさま)がこの言葉を説明するのに、当時一般に見られた霊場巡拝をたとえに引いて説明されたものであろうと言われる。

教祖在世中に「打ち分け場所」の名称を許された所もあるが、それがどのような教義的立場のものであるか、必ずしも明らかでない。現在の一般教会(名称)は、明治21年(1888)4月、東京府で教会本部が政府の公認を得て、同年7月「ぢば」に移転してから設立されることになったものである。このとき「講より教会へ」と言われるように、講が教会になったものが多い。信者の集いとしての講と、教会本部を根としてその枝先に相当する教会とは、一般教会成立の二大要素とみることができるが、その後者が「打ち分け場所」の理を受け継ぐとも悟れる。(『天理教事典第三版』P83. 2018)

## 2-16註釈のベースは『教祖四十年祭、奉仕と活動』(大正13年)

大正5年発行の『評註御筆先』には、4号5の註として「三十一のうちわけ場所」と書かれています。2号16には「神のうちわけばしよとは今日の言葉で云へば教会である」とのみ記されています。現行の本部註釈にある31カ所が大正5年段階ですでに教内で語られていた可能性があることを示唆しています。大正3年の『教祖四十年祭、奉仕と活動』には、昭和12年版(現行版も)と同様な内容があります。これが2-16註釈のベースになっていると思われます。

【芹沢茂氏解釈-2011.11.11先生宅】《「神の打ち分け場所」の本部解釈には、編集された上田嘉成先生の解釈が入っていると思われる。何を根拠に内・中・外各31か所、辺鄙な所1か所の話が出てくるのか？ 40年祭倍化運動の一環としての印象がある。》

【『評註御筆先』大平隆平.大正5(1916)年】⇒《この年の六月に始めて証拠守り即ち信符をお出しになった。其の形は長方形のもので三十一拵らへられた。これは所謂三十一のうちわけ場所に配布せらるゝ考であった。》

※この【大平】は[4号5. たん／＼と六月になる事ならば しょこまむりをするとをもへよ]に付けられた註で、2号16には「神のうちわけばしよとは今日の言葉で云へば教会である」とのみ記されている。現行の本部註釈にある31カ所が大正5年段階ですでに教内で語られていた可能性があることを示唆する。

それから又こう云ふ事もお聞かせ下されました。先では三十一ヶ所の打ち分け場所が出来ると云ふ事でありまして、それには内中外の打ち分けとなって、都合九十三ヶ所出来るので、御筆先に『神の打ち分け場所急ぎ込む』と仰せられたのは之でありまして、此の打ち分け場所に、お地場から打ち廻つて行かれるのあります。それを御神楽歌には、『広い世界を打ち廻り一せん二せんで助け行く』と仰せられてゐるのであります。

今日教会の順序を踏んでお地場に帰りますのは、此雛形によつてゐるのでありまして、打ち分け場所が出来ましたならば、三十一ヶ所を如何でも斯うでも廻つて来なければならぬのであります。所が其の三十一ヶ所の内一ヶ所だけは、遠い所へ出来るので、若しそれを一ヶ所でも抜かして来る者があれば、埋がかける事になつて、身を助けて頂く事が出来ないのであります。その代りに全部打ち廻つてお地場に帰りてお勤めをして頂いたら、盲目は目を開けて頂く事も出来れば、跛(いざり)が足を立てゝ頂く事も出来る様になるときかせて頂いて居ります。之れから思ひますと、教会を廻る順序の理を、大儀大層に思ひますのは、甚だ間違うた考へで御座ります。道は順序一つの道でありますから、我が身の都合のよい事ばかり思うてはならぬのであります。(『教祖四十年祭、奉仕と活動』P51. 1924(大正13). 天理教教会本部)

その他の「三十一ヶ所」関連の話

昭和3年に亡くなった増野鼓雪の話として三十一ヶ所の話が出ています。森口まさは、「三十六ヶ所の打場所の紋」として話しており、これは『評註御筆先』の内容と関連がありそうです。宗太郎の話は、つとめ人衆36人とつなげて生まれたものでしょうか。

打ちわけ場所の数

先日、ある人から「打ちわけ場所の数」についての記録をいただいた。

- 「復元」創刊号P5 古老聞書 三十六ヶ所
- 同22号P61 梶本宗太郎談 三十ヶ所
- 「四十年祭奉仕と活動」(大正13年)P51 九十三ヶ所
- 「教祖とその教理」(同)P127(同志会刊)三十一ヶ所・九十一ヶ所
- 「増井りん」奥谷文智著(昭和31年)P68 三十六ヶ所
- 「鼓雪全集」五巻P33 九十三ヶ所
- 高安「元一つの理」S57 九十三ヶ所
- 「創象」2号P31 三十一ヶ所
- 御教祖履歴(山中卯之助筆) 九十三ヶ所
- 「おふでさき」註釈P499 内、中、外に各々 三十一ヶ所
- 「天理教事典」P77 内、中、外に各々 三十一ヶ所

『創象』29号P27  
●はここで取り上げたもの

本部直轄の教会が多数ある中で、神様が打分け場所と仰せられたのは、我が敷島と高安大教会の二ヶ所だけである。神様の御予言に、地場を中心に六里四方に内三十一ヶ所の打分け場所が出来ると仰せられてある。して見れば、九十三ヶ所の打分け場所の中、我が敷島は御地場に最も近い内三十一ヶ所の部に属するものである。(『増野鼓雪全集. 五』P33. 昭和4(1929)年—増野鼓雪(道興) 1890-1928)

二、森口まさ女 當83才聞書 昭和20年12月25日午後14:30—15:00 (當人は文久三年生れ、美濃庄の喜多丈五郎、ならぎくの子として生ふ。現に長柄分教會長の母なり。於、本部御供所)  
明治廿年御昇天の時は24であった。縁付く迄も、その後も御本部へ参詣さして頂いた。初めて参ったのは八つ位、(明治四年)。—中略—教祖様はお参りすると『マー／＼よう参ったな』と言ふて呉れはつた。私の母(姑なり)が参つたら『マァおせきさん、よう参ったな、三十一ヶ所の打分け場所の紋、今拵らへた。皆に一つ宛やつたが(まだ一つある)これお前にやろ』。と云つて一つ頂いてかへつた。(『復元』創刊号.P5. 1946)

教祖様のお話 梶本宗太郎 (※昭和28年頃の聞書き、及び本人のメモ)  
(※梶本宗太郎—梶本松次郎の長男、明治13(1880)年—昭和30(1955)年、享年76歳。鍛冶惣分教会の初代)  
○三十ヶ所打わけ場所 / 神楽六人六組になりて、各地を廻るのである。(六六、三十六人)(『復元』22号.P61)

高野氏は天理大学を辞められたあと、各地の教会の神殿講話や教理勉強会の講師を続けられています。『創象』にまとめたことを話す、話したことを『創象』に書くという事だったのでしょか。

私は、教祖の一番いいかったことは、「よふきゆさん」の世界づくりだと書いた。／ところが、「おふでさき」を見る限りにおいては、「よふきゆさん」のお言葉は1回しかでていない。／それに比して、「かんろふだい」に関するおうたが何と多いことか。／かんろふ台を据えて、平鉢を載せ、そこにぢきもつを入れて、天に供える。そしてかんろう台をめぐる、神の定めたもうたつとめ人衆が、神の教え給うた楽に合せて、神の教え給うた歌をうたい、神の教え給うた手踊りを踊って、つとめ行う。そうすると、神は天から甘露を授けくださる。それを頂いたときには、人間は百十五才の寿命を完うすることができる。

その時には、《病まず、死なず、弱りなきようにしてやりたい。／人間の寿命を百十五才に定めつけたい。／庖塘せんようにしてやりたい。／いつも豊作にしてあげたい。／むほんの根をきってあげたい。／肥一条を教えたい。》等々と教えられている。／また、昔の先生方の口伝の話では、《「かんろふだい」の世界になったら、雨は夜ふるもので月六斎、夜中に降って朝方にやむ。日中はそよそよ風。／子供は、夫婦の間に男一人女一人さづけくださる。後は願いどおり。はたらきは昼まで働いて、昼から先は陽気遊び。》というお話が残っている。

また、そのときには、三十三ヶ所のうちあけ場所ができ、それも、内、中、外とあり、都合九十六ヶ所あり、このうちあけ場所をお詣りし、ぢばのかんろふ台にお願いにくるなら、どんな病人でもたすけ上げようと仰せられたという。但し、**この口伝の話は「おふでさき」にはない**。／このように、あの当時の世界一列の人々が、憧れ求めていたことを、叶えてあげようと仰せられている。／それについての、おつとめの理合が詳しく説かれている。そのお話の中に、「元の理」の話が出てくる。すなわち、かんろふ台を囲んでのつとめは、親神が、人間をつくり、世界をおつくりになったすがたを表徴されたものといわれる。／宇宙存在の原理であり、宇宙運営の原理表徴である。そう教えられ、そう信じて来た。「おふでさき」1711首の大半は「かんろふだい」の理、つとめ人衆を寄せる模様に関するおうたのように感じられる。（『創象』34号.P10.1986）

かんろふ台の十三段、十三塔という十三段の塔は、大和の村々のお寺によく見られし、一寸した家の庭にも見られる。拝みのシンボルである。十三は、十二支を一廻りした次の段階で、前進を意味する。虚空蔵さんのシンボルである。虚空蔵は農業の神さんで、成長の守護神である。／六角の六にも意味を考える。亀は六角である。頭尾手足二本ずつ六である。それで蔵六という。／**三十二ヶ所の打ちあけ場所を廻ってという。四国三十三番札所を廻ってという民俗に似ている**。（『創象』34号.P13.1986）

百科事典マイペディア虚空蔵菩薩【こくうぞうぼさつ】—〈こくぞうぼさつ〉とも。知恵が虚空のように広大な菩薩。頭に宝冠を頂き身に飾りをつけ、右手に知恵を象徴する剣、左手に福德を表す知恵宝珠を持つ。人に現世・来世の利益を授けるとされ、この菩薩を本尊とする虚空蔵法という修法が平安期以後広く行われた。

## 高野氏の夢想

それにしても、後で、誰かが言っていた。／ 教皇が、病める人々に手を差し伸べて、なでてやっていたが、あの場合、キリスト伝のように奇蹟がおこったら、もっとよかったのになあ。／ そこで私は思った。／ それはちば親里においておこるのではないか。甘露台においておこるのではないか。三十一カ所のうちわけ場所、内中外とまわって、甘露台に願い来るなら、不自由な身体も自由な身体にしてあげる、という先人たちから聞いた話を思い出した。／ 甘露台は、肝腎要の命の継ぎ場所の甘露台である、という先人たちの話を思い出した。／ ちばこそ、親里こそ、不思議なたすけのあるところではないか。世界の人々が、元のちばか親里やと言って集り八町四面は世界から来た人々で埋まり、その中勤めの人衆が甘露台を中心に、神さまが教え下され歌をうたい、神さまが教え下された鳴物をならし、神様が教え下された踊りを踊る。何千何万の人々の心が、一点に集り、神のめぐみをたたえ、神の望みの世界づくりはげむことを誓う。

そのとき、天から甘露が降って来る。これが寿命薬になる。／ 世界の人々がよろこぶ。世界の人々が、天の与えというて集って来る。／ そういう未来のおちばの幻の象を夢み、そういう幻の実現のために、この命を使わしてもらいたいと思った。／ そう思うと、不思議に心が勇んで来た。／ 私は、すばらしい未来の夢を見せてもらった。これが今度の旅行の最大な収獲であったと思う。（『創象』2号P31.1979）

### これはバチカンでローマ教皇の謁見式場に立ち会った時の感想

私は、近ごろ、三十一カ所の打ちわけ場所の夢をみている。／ 昔の先生方が言っていた。／ 「かんろふだいが建って、かんろふだいづとめが行われるようになったら、三十一カ所の打ちわけ場所ができる。それも内、中、外とできる。内三十一カ所、中三十一カ所、外三十一カ所、合わせて九十三カ所できる。そのなかの一カ所は遠いところにある。それもまわらんなん。その打ちわけ場所をみんなまわって、おちばへかえり、かんろふだいをお願いしたら、どんなことでも叶えてくださる」／ その打ちわけ場所とはどんなものか。昔の先生方は、教祖から聞いたらしいが、はっきりしたことは聞いてないらしい。いまの教会のようなものだろうかという。／ 内、中、外とはどこのことであろうか。それも、はっきり聞いておられる方はいないようだ。そのなかの一つは遠いところにある。それを抜かしてはなんという。それはなぜか、それも伝わっていない。／ それで私は想像する。夢をみる。／ 打ちわけ場所とは、神さまの出張り場所という意味ではないか。／ 内、中、外とは、これを日本全国にとっていえば、内は大和、中は五畿内、外はその外の国中と考えられないだろうか。／ これを地球上の世界中にとってみれば、内は日本、中はアジア（ソ連から中近東を含めて）ヨーロッパ、外はその他のアフリカ大陸、南北アメリカ大陸、その他と考えられないだろうか。／ そのなかの一つの遠いところとは、日本では、どこになるのであろうか。世界では、北極あたりになるのでなかろうか。／ もっと大きく、宇宙全部と考えて、内、中、外はどこになるのであろうか。そこまで考えられない。あえていえば、内は地球、中は太陽系、外はその外の宇宙。／ アホかいな。おまえの頭まともか、といわれそうだ。そこまで考えないでもよい。／ 地球上だけを考えてみても、夢は楽しい。（『創象』27号.1986）

高野氏は、ご自分で物事に白黒つけない性格だとどこかに書かれていました。これは教祖、これは後の時代の捏造だといった区切りを付けない気がします。

## 「よふきゆさん」の世界づくりに心を向け、その実践にはげんでくれー高野友治氏の神観

高野友治氏は、「天理教の伝道の理念は、人間みんなに、神の思いを知らせ、人間みんなを陽気遊山の世界づくりをたのしむ人間に導くことだ」と云います。こういうことを言う人は、今の天理教には存在しなくなってしまったように思います。今のお道は、一般社会の基準が目的になっているようです。

神が、人間を作られたのは、陽気遊山がみたいゆへからと言われている。それか、この世の根本原理だと思っている。すべてのものの中に、この神の思いが入っていると思う。すべてのものは、この方向に向かって動いていると思う。／ その神の思いを具現すること、といっても、人間だけで具現出来るものでなく、神の援助がなければ出来ないものであるから、具現しようと努力することと言った方がいいと思うが、それが人間の生き方であり、神の望み給う姿であると思う。／ それで天理教の伝道の理念は、人間みんなに、神の思いを知らせ、人間みんなを陽気遊山の世界づくりをたのしむ人間に導くことだと思っている。（『創象』21号.P24.高野友治.1984）

私は、天理教の教えの中で一番大切なことは、神がなぜ人間を作られたかという教えと、人間は何を為すべきかの教えだとももっている。

これを「おふでさき」のおうたで言うと、

月日にわにんけんはじめかけたのわ よふきゆさんがみたいゆえから 一四 25

と、そして前記の出世のおうたである。

だん／＼とこどものしゆせまちかねる かみのおもわくこればかりなり 四 65

の二首である。

神は、「ようきゆさん」がみたいゆえから人間を作り、世界を作ったといわれる。「よふきゆさん」というのは、常に前進し、どんな苦勞の中でも、勇んで切り退け、より良き世界を作ってゆくことである。／ **何もしないで、遊んで、人々を自分の意のままに動かし、自分の欲望を満足させている姿と正反対**である。／ このところが、社会一般の人々の考え方と、神さまのお考えとの違いの最も大きいことの一つだと思っている。／ どうして**神さまが、神さまの思いで作った人間が、神さまの思いと正反対の人間になったのであろうか**。（『創象』41号P11.1987.高野友治.私家版）

# 天理教はなぜ「病さとし」の宗教になったのか

「病のたすけー病さとし」は、個人の病気をたすけてもらいたい立場から出てくる

高野氏は「教祖は世界たすけという立場において教えを説いた」のに対して、「受ける方は我が身たすかりたいという立場において教祖の教えを聞いた」ので、「そこに大分開きがある」と云います。現在の天理教は、教祖の立場を忘れて、信者の立場から教祖の話を解釈しようとするところに大きな間違いがあるのです。

「世界たすけという立場からおやさまは何の病気は何の因縁という話は説かれたはずがない」ともいいます。「人間を作られたのは、陽気遊山がみたいゆへから」という神の思いからすれば、そういう話は出ないはずだということです。

この後、講演では具体例として「御神前名記帳」の話に入っていきます。

【1967年、高野友治氏の講演から】

教祖存命当時の教祖のお話というものと、それを受ける信者側の受け方が違っているのじゃないかということを考え始めたということです。というのは、教祖のお考えは、世界たすけであったと思う。世界一列たすけたいというお考えであったと思う。ところがあの当時の信者たちが、受ける受け方というものは、自分の家の病気災難とか、いろいろなものがあって、それを助けてもらいたいために教祖の教えを聞きに行ったということです。

だから教祖は世界たすけという立場において教えを説いた。受ける方は我が身たすかりたいという立場において教祖の教えを聞いたということ、そこに**大分開きがあるんじゃないかな**と思うんです。今たとえて申しますと、現在残っている、皆さまが貴重とされているところの「病のたすけ」でありますけれども、これあたりは我が内、我が身とか個人の病気をたすけてもらいたい立場においての聞き方から出てくるものです。

世界たすけという立場から**おやさまは何の病気は何の因縁という話は説かれたはずがない**と思うんです。世界たすけの立場からはそういう話はないはずだと私は思います。我が身たすかりたいという者が、そういう立場において、教祖の話を聞くとそうやってきただけのこと。そこら辺に大分食い違いがあるのではないかと思う。

「御神前名記帳」という慶応3年に書かれた事情身上お願い台帳のようなものが残っています。ここには、「一日平均して、七〇人」くらいの「病気をすけのための願いであって、なおったら来なくなる程度の参り人」があったことが分かりますと高野氏は記しています。この記録は「信者側の受け方」を示すものということです。

「御神前名記帳」は、慶応三年四月五日から、同五月十日までの帳簿で、二冊からなっている。当時のお願人の名前を記し、それに居住地や願いの筋を書きとめた帳簿で、いわば、事情身上お願い台帳といったものである。これを見ると、記載人名が二五〇〇余名あったと思う。もともと全部が願人でなく、何村何某妻誰それ、何某伴何それ、娘何それなどと書いてあるものもある。それにしても、多数の願い人があったことを知るのである。一日平均して、七〇人となる。そんなに多くないとしても、一日平均五〇人の願いはあったものと考えられる。（「教史研究の宿題」P4『天理教校論叢』7号・高野友治・1966）

参り人、願い人は多かったようである。しかし、まことに頼りない参拝者であり、願人どもであったと思うのである。何でお参りに来たか、お願いしているかというに、安産の願いが一番多いようであるが、頭が痛いとか、インコウセンとか、グドンとか、ヨイヨイとか、ウシとか、小便近とか、いろいろの願いが記入されている。即ち病気をすけのための願いであって、なおったら来なくなる程度の参り人であったようである。二五〇〇名余ある中で、私が知っている名前（その後の天理教の歴史に出て来る名前）は、前栽村幸右衛門ぐらいのものである。慶応三年にはお詣りに来たが、明治十年ごろには、もう来なくなっているのではないか。明治十三年の「転輪講社連名簿」には出ていないのである。（「教史研究の宿題」P5）

参拝の目的は、参拝のみと考えられる者延べ984名、祈願内容等を記入する者1,190名。病気などの祈願では、「さん八」（妊娠8ヵ月）や「半さん」（流産）など、お産関係が200名以上で最も多く、眼、腹、頭（頭痛やのぼせ等）、足、皮膚、咽喉、月水滞（とどこおり）など婦人病、胸、肩、癩（※しゃくー原因が分からない疼痛を伴う内臓疾患）、疝（※かんー子どもの様々な病状を指す言葉）などの順で続く。病気以外では、「さん礼」（出産のお礼）など礼参やお守り、家内安全、百姓作満、失せ物など種々記されている。（『天理教事典第三版』P363）

「病だすけ」の神とされる教祖

『大和国高瀬道常年代記一大日記』(1999.清文堂)の明治12年のところに当時「天輪王」と呼ばれていた天理教のことが出ています。これを解説した松田理治氏は、「よろづたすけの神として、この十二年には、とりわけコレラのたすかりを願う人が、道常の記述の通り多かったものと推察します」と記し、『稿本教祖伝』『稿本逸話編』の「病だすけ」の例を挙げています。これらは高野氏の言い方からすれば、「信者側」の見方ということになり、現在の天理教は、「神」の立場を忘れてしまって、「信者側」の意向に沿った教団になっています。これでは「神」の教えを伝えることはできません。

**虎烈刺病二付参詣之多きハ天輪王柿本辺初屋敷村、矢田地蔵、小平尾上人イコマタニなり、**(※『大日記』上.P396)

つまり、コレラにつき参詣の多いのは、庄屋敷の「天輪王」、そして「矢田地蔵」、さらに生駒谷の「小平尾上人」であると、道常は書いています。「矢田地蔵」とは、現・奈良県大和郡山市にある矢田寺のことで、ここには延命地蔵菩薩が安置されています。また、現・奈良県生駒市には小平尾という地名があり、「小平尾上人」に当たる具体的な場所までは特定できませんでしたが、ここには現在、浄因寺なる寺と、行基の建立とされる宝幢寺があります。／ 本教の草創期の文書には、天理王命の神名を、天輪王命などとした例が多く見られます(30ページコラム①)。明治十年には、すでに庄屋敷村と三島村は合併されていて、新しく三島村となっていますので、正式には庄屋敷の地名はなくなっていますが、まだまだそのように呼ばれることが多かったのでしょう。添上郡の「柿本辺」というのは、明治初年に廃寺となったといわれる、柿本寺(しほんじ)の辺りかと思われます。この柿本寺跡は今の天理市櫟本町にありますが、道常にとっては、庄屋敷は櫟本近辺だという感覚だったのでしょうか。

道常は、この時点では、まだお屋敷を訪れていませんので、ここで筆録したことは、あくまでも風聞の域を脱し得ないものなのでしょうが、これらの日記記事で特筆すべきことは、①コレラのたすかりを願って多くの人々がお屋敷を訪れていること ②和光寺、大神神社、矢田寺という、有名な寺社に交じって本教が紹介されていること——です。

『稿本天理教教祖伝』には、嘉永七年(1854)の「をびや許しの始め」(※P36)をきっかけとして、次々とその珍しい守護を頂く者が現れ、「庄屋敷村には安産の神様が御座るそうな」(※P42)と、口伝えに広まったことが伝えられ、また、明治十二年からさかのぼること十六、七年前の、文久二、三年(1862、1863)には、「庄屋敷村のをびや神様」(※P44)の名が大和国中に高まっていたことが書かれています。／ これと並行して、『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、文久元年のころとして、「庄屋敷へ詣ったら、どんな病気でも皆、救けて下さる」(「八 一寸身上に」)ということをお詣りした人のことが記され、ほかにも同書には、明治四年に「どんな病気でも救けて下さる神さん」(「二四 よう帰って来たなあ」)、同七年に「大和庄屋敷の天竜さんは、何んでもよく救けて下さる」(「三六 定めた心」)、同十一年に「庄屋敷には、病たすけの神様がござる」(「六二 これより東」)という評判があったことも伝えられています。また、教祖も、明治六年夏の山本利三郎先生のおたすけの場面で、「どんな病でも救からんことはない」(「三三 国の掛け橋」)、明治十五年の小西定吉先生には、「万病救ける神やで」(「一〇〇 人を救けるのやで」)と仰せられています。よろづたすけの神として、この十二年には、とりわけコレラのたすかりを願う人が、道常の記述の通り多かったものと推察します。／ 道常は「天輪王」を、数多ある参詣所の一つとして捉えていたに過ぎないと想像します。しかしながら、この時点で立教から四十年ちょっとしか経っていないものの、前出の名刹に劣らず、お屋敷は近在に聞こえた存在だったのではないでしょうか。(『みちのとも』2022年2月号.P28.「『大日記』に見る道のあしあと.第14回」松田理治)

その年十一月五日出産の当日（註三）、大地震があつて、産屋の後の壁が一坪余りも落ち掛つたが、おはるは、心も安く、いとも楽々とおとこの児を産んだ。人々は、**をびや許しを頂いて居れば、一寸も心配はない**。成程有難い事である。と、納得した。時に、おはる二十四歳であつた。生れた児は、長男亀蔵である。（『稿本教祖伝』P36）

先に緒口（いとぐち）を開かれたをびや許しの珍しい守護を頂く者が次々と現われ、**庄屋敷村には安産の神様が御座るそう**な。生神様やそうな。という声が、口から口へと八方に弘まり、初産を前にして心配して居る人や、産後の煩いで床に臥して居る人、さては、かね／＼お産の重いのを苦にして居た人は、次から次へと、ふしぎなたすけを願う手寄り集うたばかりでなく、**重病人があつて頼みに来ると、教祖は、いつもいと快くいそ／＼とお出掛けになった**。（『稿本教祖伝』P42）

このをびや許しが、**よろづたすけの道あけ**となつて、教祖の六十五、六歳の頃、即ち文久二、三年には、庄屋敷村のをびや神様の名が、次第に大和国中に高まるにつけ、金銭の無心を言う者も出て来た。並松村で稻荷下げをする者が来た時は、先方の請いに委せて二両二分を與えられた。文久二年頃の事である。しかし、世間の嫉み猜みや無理難題には頓着なく、親神の御名はいよ／＼弘まり、のちによふぼくとして勤めた人々が、次々に引き寄せられて親里へ帰つて来た。（『稿本教祖伝』P44）

早速お詣りした。すると、夕方であつたが、教祖は、／「よう帰つてきたな。待っていたで。」／と、仰せられ、更に、／「一寸身上に知らせた。」／とて、神様のお話をお聞かせ下され、ハツタイ粉の御供を下された。お話を承つて家へかえる頃には、歯痛はもう全く治っていた。が、そのまま四、五日詣らずにいると、今度は、目が悪くなつてきた。激しく疼いて来たのである。それで、早速お詣りして伺うと、／「身上に知らせたのやで。」／とて、有難いお話を、だんだんと聞かせて頂き、拜んで頂くと、かえる頃には、治っていた。／それから、三日間程、弁当持ちでお屋敷のお掃除に通わせて頂いた。こうして信心させて頂くようになった。この年コトは三十二才であつた。（『稿本逸話編』P7「8 一寸身上に」）

「よう帰つて来たなあ。あんた、目が見えなんたら、この世暗がり同様や。神さんの仰っしゃる通りにさしてもろたら、きっと救けて下さるで。」／と、仰せになった。彦太郎は、「このままで越すことかないません。治して下さるのでしたら、どんな事でもさしてもらいます。」とお答えした。すると、教祖は、／「それやったら、**一生、世界へ働かん**と、神さんのお伴さしてもろうて、人救けに歩きなされ。」／と、仰せられた。「そんなら、そうさしてもらいます。」と彦太郎の答えが、口から出るか出ないかのうちに、目が開き、日ならずして全快した。（『稿本逸話編』P33「24 よう帰つて来たなあ」）

一家の者が悲嘆の涙にくれている時、年末年始の頃、（陰暦十一月下旬）当時十二才の長男幾太郎が、竜田へ行って、道連れになつた人から、「大和庄屋敷の天竜さんは、何んでもよく救けて下さる。三日三夜の祈祷で救かる。」という話を聞いてもどつた。それで早速、親子が、大和の方を向いて、三日三夜お願いしたが、一向に効能はあらわれない。そこで、男衆の為人を庄屋敷へ代参させることになつた。朝暗いうちに大県を出発して、昼前にお屋敷へ着いた為人は、赤衣を召された教祖を拝み、取次の方々から教の理を承り、その上、角目角目を書いてもらって、戻つて来た。／これを幾太郎が読み、りん（※増井）が聞き、「こうして、教の理を聞かせて頂いた上からは、自分の身上はどうなつても結構でございます。**我が家のいんねん果たし**のためには、暑さ寒さをいとわず、二本の杖にすがつても、たすけ一条のため通らせて頂きます。今後、親子三人は、たとひ火の中水の中でも、道ならば喜んで通らせて頂きます。」と、家族一同、堅い心定めをした。（『稿本逸話編』P58「36 定めた心」）

明治十一年十二月、大和国笠村の山本藤四郎は、父藤五郎が重い眼病にかかり、容態次第に悪化し、医者の手余りとなり、加持祈祷もその効なく、万策尽きて、絶望の淵に沈んでいたところ、知人から「庄屋敷には、病たすけの神様がござる。」と聞き、どうでも父の病を救けて頂きたいとの一心から、長患いで衰弱し、且つ、眼病で足許の定まらぬ父を背負い、三里の山坂を歩いて、初めておぢばへ帰つて来た。教祖にお目にかかったところ、／「よう帰つて来たなあ。直ぐに救けて下さるで。あんたのなあ、**親孝行に免じて**救けて下さるで。」／と、お言葉を頂き、庄屋敷村の稲田という家に宿泊して、一ヶ月余滞在して日夜参拝し、取次からお仕込み頂くうちに、さしもの重症も、日に日に薄紙をはぐ如く御守護を頂き、遂に全快した。（『稿本逸話編』P109「62これより東」）

父の利八が代参で、早速おぢばへ帰ると、教祖から、／「この屋敷は、人間はじめ出した屋敷やで。生まれ故郷や。どんな病でも救からんことはない。早速に息子を連れておいで。おまえの来るのを、今日か明日かと待ってたのやで。」／と、結構なお言葉を頂いた。一中略一 翌朝、死に瀕している利三郎を、教祖の御前へ運んだ。すると、教祖は、／「案じることはない。**この屋敷に生涯伏せ込む**なら、必ず救かるのや。」／と、仰せ下され、続いて、／「国の掛け橋、丸太橋、橋がなければ渡られん。差し上げるか、差し上げんか。荒木棟梁、タタタタ。」／と、お言葉を下された。それから、風呂をお命じになり、／「早く、風呂へお入り。」／と、仰せ下され、風呂を出てくると、／「これで清々したやろ。」／と、仰せ下された。そんな事の出来る容態ではなかつたのに、利三郎は、少しも苦しまず、かえつて、苦しみは去り、痛みは遠ざかつて、教祖から頂いたお粥を三杯、おいしく頂戴した。（『稿本逸話編』P52「33 国の掛け橋」）

夫婦揃うておぢばへ帰らせて頂き、妻のイエがをびや許しを頂いた時、定吉が、「この神様は、をびやだけの神様でございますか」と、教祖にお伺いした。／すると、教祖は、／「そうやない。万病救ける神やで。」／と、仰せられた。それで、定吉は、「実は、私は、胸を病んでいる者でございますが、救けて頂けますか。」と、お尋ねした。すると、教祖は、／「心配要らんで。どんな病も皆御守護頂けるのやで。**欲を離れなさい**よ。」／と、親心溢れるお言葉を頂いた。（『稿本逸話編』P169「100人を救たすけるのやで」）

「いんねん」でなく「てびき」—宇宙には、この宇宙を、人間が楽しく勇める世界につくってみせてくれという意志がある、それが神だ

この文には、「『よふきゆさん』の世界づくりに心を向け、その実践にはげんでくれ」という高野氏の「神観」が端的に表現されていると思います。

病気とか、災難とか、事情とかの原因を過去の結果としての因縁とみるか、あるいは、神がその人、その集団を、より良き状態に導いてくださるための手引きとみるか、それを論じてみたいと思うのである。／ はじめから結論をいってすまんが、私は、神の手引きとみたいので、因縁によってそうなったとみたくないのである。

—中略—

私は、世の中の出来事、人間の上の出来事は、神の手引きとしての作用があるのだと思っている。／ もちろん、人間の上の現実には、人間がつくったのである。その人間の過去とは無関係とはいえない。過去があって現在があることは否定できない事実である。／ そこまでは否定しない。ただ、現実を動かしている力は、過去からの力だけでなく、未来からの力も作用している。先祖伝来、伝統の力というものがある。それとともに、かくありたいという未来をつくり出そうとする力が、現実を未来へ向かって動かす力となっているといたいのだ。／ これは昔の哲学者も説いている。過去から押す力が五分、未来から引く力が五分と。／ だが、私は過去から押す力が三分で、未来から引く力、いいかえると、未来の世界を、こんな具合につくり出してみたいという人間の願望の力が七分で、それで現実が動いているのだと思っている。／ 人間がいない何十億年前から、この世は動いていた。宇宙は動いていた。それでは、その力は何と説明するか、と質問が出ると思う。私は、それは神の思いの力だと思っている。／ 私は、宇宙のはじめから、少なくとも、宇宙が形あるものをつくろうと動きかけた段階において、一つの意志があったと思う。／ この宇宙に、形あるものをつくり、生命あるものをつくり、みんなが、楽しく、よろこび、勇んで、生き甲斐を感じる世界をつくりたいという意志があったと思う。／ それはいまもある。永遠にある。／ しかも、この神の意志は、人間（生物）が一人前にならない段階においては、神の意志だけで、この世を楽しい世の中にしていただされていたのだと思っている。だが、神の思いでは、人間にその楽しい世界づくりをやらして、それに神が力を添えて、楽しい世界にしてやりたいという方向性をもっている。／ それは、人間をよろこばせたいという神の思いからくるものと思う。なぜなら、人間にとって、真の楽しみは、他からしてもらい、与えられることでなく、自ら考え、自らの力でつくり上げ、また考え直して、別なものをつくってゆく、そのなかにあるからである。／ また神は、人間の真の楽しみはそこにあることを知ってくれといわれていると思う。／ 要するに、**宇宙には、この宇宙を、人間が楽しく勇める世界につくってみせてくれという意志がある**と思う。私は、**それが神だ**と思っている。／ だから、人間においては、未来をつくってやっていくところに問題があるのであって、過去のことは、問題にしないでいいとはいわんが、二次的問題だと思う。

一次的問題は、未来に、すべての生きものが、楽しく、よろこび、勇める世界をつくることにあると思っている。／ 人間の世界のどんなことでも、過去からの結果ともみれるが、未来のより良き世界づくりへの出発点ともみられる。／ **私は、現在を、より良き未来をつくるための出発点とみる。すなわち「いんねん」とみないで、「てびき」とみようとするものである。**（『創象』25号、P2、1984）

## どうして「てびき」の教えが「いんねん」の教えに変わったのか

教祖のお話の主体は、よふきゆさんの世界づくりにあることを考察した。この節においては、**どうして「てびき」の教えが「いんねん」の教えに変わったものか**、それを考えてみたい。／ —中略— ／ 明治20年までの書きものには、「いんねん」の話はなかったと思う。「おふでさき」にはある。しかしそれは「もとのいんねん」の意味であって、善因善果、悪因悪果の意味ではない。

明治20年代になると、因果応報的な「いんねん」話が、胸をしめつけられるように強く出てくる。そういう印象をもっている。／ どうして明治20年代に、因果応報的な「いんねん」話が出て来たのか。／ この明治20年代という時代は、天理教の信仰が、爆発的に発展した時代だ。／ 明治20年の教祖のおかぐれになったころの天理教の信者は、私は3万人か4万人程度だと思っている。それが明治29年末の統計発表によると、313万7113人になっている。当時の新聞は、3百万とか4百万とっている。10年間に百倍も発展したのだ。どうして、そんなに発展したのかというと、とにかく不思議とおたすけがあがった。「なむ天理王命」とおがんでやると、どんな病人もたすかった。十年も寝たきりの病人が立ちあがる。目が見える、口がきける、耳がきこえる、不思議がおこった。／ それで信者たちは、嬉しくてたまらず、家業を捨てておたすけの旅に出た。どこへ行っても、神さまのように奉られる。助かった人は家も財産もいらない、この神さまのために生涯を捧げますと誓って、おたすけに出る。／ さればこそ、10年の間に、百倍も信者がふえたのだと思う。／ 一口に言うと、神さまが、奇跡を見せて下されたのだ。布教者が、それほど努力したとも思われない。（他宗教の伝道者と比較して）／ 病のさとしなどいう方程式はなかった。

ところが、布教者が不思議なたすけに感激して、布教に飛びだし、先生々と崇られている間に、不思議なたすけが、だんだん少なくなってくる。その時点において、病のさとしが出て来たものと思う。／ 「やまいのものはここから」／と「みかぐらうた」に仰せられている。だが、どういう心づかいが、どういう病になるとは仰せられてない。／ **このおうたの本当の意味は、病の元は、神が、人間に、神の方向を向いて、神の言うことを聞いてくれ、という手引きだ**、と仰せられているものと拝察する。

ところが、布教者の周囲に、**心学道話**の話があった。この話では、人間は自分の本分を知って、本分に合わせて生きよ、と教えている。／ **仏教の説話**があった。お寺の説教があった。そこで因果応報のお話があった。**淘宮術**の話があった。こういう人相の人は、こういう性格で、こういう持病をもっている。こういう運命をもっているから、今日の運勢に合わせて、方位方角、時間をはかって行動すれば吉となり、こういう方角、こういう時間に凶となると説いていた。／ それらの人たちも、病をたすけられて信者になり、布教師になっていた。だから病人の前に立つとその種の話がでたものと思う。／ そういう話が伝えられ、それを聞き、自分のお聞をした神さまのお話と照し合わせて説く、向うが成程と合点する。病気がなおる。そういう体験、何百人何千人の体験が語り合わされている間に、さとしの方程式みたいのものが出来て来たのでないか、と私は思っている。／ **神さまの、たすけの主体は、よふきゆさんの世界づくりに参加してくれ、という「てびき」だ**と思う。／ それを**人間の方は、不思議なたすけこそ、たすけの本体だ**と思いはじめた。神さまは「てびき」と仰せられている。本体は、世界の人間が、みんな喜び、勇める世界をつくるところにある。その辺に、**ゆるやかな大きい転換があった**ように思う。（『創象』26号.P4.1984）

## 明治20年代後半の 天理教布教と淘宮術

『大森町大教会史』には、天地組の東京布教は、淘宮術の先生の入信から活発になっていったことが書かれています。「大森町」は、淘宮術の関係から入信した久保治三郎氏(麴町三代)の息子清治郎氏が初代会長となり、のちに愛町分教会の初代会長になる関根豊松氏が二代になっていきます。

天地組(※北大教会系統)による東京布教は、天地組六番分講であった豊岡支教会(25年9月18日、木岡儀八郎氏)の岸本唯之助(※可賀美)氏によって、明治26年8月頃より始められた。—中略— 上京後の寄留先は麴町区永田町二丁目十六番地(現千代田区永田町二丁目十六番一号、都立日比谷高校校庭)であったということができよう。—中略— 永田町といえば現在、国会議事堂をはじめ議員会館等が点在する政治の中心地であるが、当時も他の市街地とは趣きを異にした高級住宅地であった。—中略— かくして、木岡会長の期待を受けて上京した岸本氏は、勇躍して布教を開始した。ところが、東京市内でもことさら山の手意識の強い麴町区界隈であったため、門前払いの毎日であった。困り果てた岸本氏は呉服物の行商を思いつき、布教の手段としたのであった。しかし、周辺一帯の家々には大店の注文取りがやって来るので、行商は相手にしてもらえず、にをいがけの成果はなかなか挙がらなかった。／ こうした苦労の日々を送っていたある日、永田町の日枝(ひえ)神社(現千代田区永田町二丁目十番、当時官幣中社)に勤める千勝季孝(すえたか)氏ににをいがかかった。千勝氏は当時、東京近在で流行(はや)っていた**淘宮術の先生**だったが、天理教の教理に感じて入信した。入信日は定かでないが、岸本氏が東京布教を始めて以来初めて手引いた人であったと思われる。のちに岸本氏が結講の時、副講元となった。千勝氏の入信により、岸本氏の布教は急に活気づいたのであった。まずは千勝氏の友人で淘宮術仲間であった熊野吉隆氏夫妻が入信した。つづいて、千勝氏夫人が淘宮術のかかわりから埼玉県北足立郡蕨町の板倉喜代平氏を手引いたのであった。板倉氏について、『天理教伝道者に関する調査』への報告書(以後、『調査書』と記す)には次のごとく記述している。

【入信の動機】千勝氏ノ妻ノ勧誘ニヨリ教理ヲ信服シ入信ス。／【布教を決心するに至りし理由】淘宮術ノ熱心家デアリ、本教ノ教理ノ卓越セル、シカモ人心改善ニ適切ナルヲ感じ、故郷ニ布教ヲ決心ス。／【入信後布教迄の職業】織物製造業

こうして岸本氏は、板倉氏がたまたま蕨町の人であったことから蕨町方面へ出向くようになり、板倉氏を丹精しながら布教して歩いたのであった。そうしたなかに板倉氏は段々と教理が納まって、積極的に信仰するようになっていった。淘宮術の先生であった板倉氏がお道に熱心になったことから、**近在の淘宮術信奉者が次々と入信**するようになった。(『大森町大教会史』P8.天理教大森町大教会史編纂委員会編.1988)

【淘宮術—ウィキペディア】—淘宮術は、天保5年に横山丸三が創始した開運のための修養法で、「淘」はよなげる、洗い清めるの意、「宮」は心の宿るところ、すなわち人体を表す。人は生まれつきの癖を洗練することにより、淘げのできた心、すなわち本心が顕われ、生まれつきの運命を改善できるとし、気質の偏りを矯正して幸福な人生を過ごすよう修養する。

## 天理教の「病なおし」は「プラシーボ(にせ薬)」効果？

「おふでさき」に、5号44. <ぢつやとてほふがへらいとをもうなよ こゝろのまことこれがしんぢつ>、45. <にんけんハあざないものであるからに めづらし事をほふなぞとゆう>というのがあります。「ほう」というのは、法術、修験道や密教などで行われる祈禱による病なおしのことをいったものでしょうか。心学道話、仏教の説話、陶宮術などもその類に加える事が出来るかもしれません。また、現代では、プラシーボ効果で、にせ薬であっても、生理的変化を起して病気がよくなったりするし、心理療法などもそれに類する行為だとする見方もあるようです。教祖はそれを5号39. <ほふやとてたれがするとハをもうなよ このよ初た神のなす事>と云います。しかし、これは教祖の教えではありません。教祖の教えは、44のお歌にある「こゝろのまことこれがしんぢつ」にあります。

生徒の潜在能力に教師が先入観を持つ時、生徒に同じく接しているつもりでも無意識に違う対応をする。その結果、学力差が現れる。授業で褒められた子は先生が好きになり、科目に好奇心を示す。面白いから勉強がはかどる。成績が上がり得意科目になる。先生や他の生徒から認められて自信がつき、さらに勉強が進む。スポーツや芸術の世界も同様だ。

医療現場でも患者と医者の中に同じメカニズムが働く。プラシーボ効果は虚構が実際の力を発揮する例だ。**薬用成分が含まれていなくても薬だと信じると効果がある**。例えば手術後にモルヒネを使用すると72%の患者に効いたのに対し、鎮痛剤だと偽って、ただの生理的食塩水を注射した場合でも40%の患者に鎮痛効果がみられた。モルヒネの方がよく効くのは当然だが、その大半がプラシーボ効果のおかげである。胃潰瘍の患者にプラシーボを与え、「この薬は新しく開発されたばかりで非常に効果が高い」と医師が説明する場合には七割の患者に向上が認められた一方で、看護師が事務的に出す場合には患者の三割以下にしか有効でなかった。投与の仕方によっても効果は異なる。プラシーボは錠剤・座薬・筋肉注射・静脈注射・点滴など様々な形で処方できるが、ほぼこの順で効果が高まる。特に点滴だと「薬」が注入される間ずっと患者が意識するのでよく効く。鎮痛作用などの感覚にとどまらず、胃酸や血液中の白血球・コレステロール・グルコース・コルチコイドの量などの生理的変化も起こす。だからこそ新薬認可に際しては二重盲検試験を実施してプラシーボ以上の効果を証明する必要がある。

—中略—

臨床心理学や精神分析も実はプラシーボでないか。フロイト、ジャック・ラカン、カール・ユングが壮大な物語を作り上げたが、それらは物的証拠に支えられた科学的証明ではない。ロールシャッハ投影法などに頼る学派も同様だ。精神と身体の関係が不明な以上、心理療法によって心身症が治る理由はわからない。心身症は確かに存在するし、臨床心理学や精神分析は有効だ。その事実は疑えない。だが、治癒の原因が何かは別の問題だ。心理カウンセリングをプラシーボでないかと疑うのは貶めるためでない。**そもそもプラシーボ効果が謎なのである**。(『格差という虚構』P312. 小坂井敏晶. 2021. ちくま新書)

天理教が明治20年以降に布教を全国的に展開していった当初は、集まった献金を上級に持っていく習慣がなかったようで、集まった献金の使い道が分からず、吉原に遊びに行っちゃったというような話も、高野氏は教会等の講話でしていますが、これは聴衆を笑わせて飽きさせないための一つの話術で、「枯野の夢」の話のように、大部分は信者のために使っていたのだらうと思います。

大正時代の東本では、今風に言い換えれば、年中無休、宿泊可の大人食堂を開いていたようなもので、そこから入信して布教師になる者も出、入信しなくても、自分の生活が結構になれば、月次祭には参拝して、献金もしてくれるのです。これは東本に限らず、ある時期の天理教の教会で多く行われていたことではないでしょうか。

教会は、信者のために、いや困っている人のために尽くさなければいけません。

### 8、宇野浩二の「枯野の夢」

大正時代の審美主義文学の旗頭宇野浩二は「枯野の夢」の中で、天理教を次のように評している。（註 この小説は昭和九年の発表であるが、少くとも天理教に関する感じ方は大正時代のものだと思う。彼は大正末期から昭和九年ごろまで脳をわずらい、精神的なブランクがある。そこで大正時代の天理教観としてここに掲げる）。

「私には神さんなんてあつてもなうてもかめへんネ。わしは、天理さんが、信者から上げた金を、みな信者のために使ふちふ主義が好きやね。……ほんまの話や。その証拠に、天理さんへ行って、今日から信心するいうたら、信者でなうても、その日イからすぐ引き取って養うてくれよる。わしは、あの主義が好きやネ。わしらには学者のいふ事はよう分からんから、社会主義なんちうもんもよう知らんけど、天理さんは、社会主義が理屈だけでいふ事を、本真にしてるやうにわしには思へるさかい、そこが私は好きやネ。そやから、私は大和へ帰るたんびに天理さんへ寄って銭を上げることにしてんネ」

これはこの小説の主人公文助の言葉である。大正時代には天理教の教会は、このように見られていたようだ。この小説は関西弁で書かれているから大阪の事かとも思うが、東京本所厩橋の東本分教会がそうだったという。否それ以上だったようだ。当時本所界隈の労働者で、雨降りなどで仕事がなく、その日の日当にありつけないものは、こっそりと東本分教会の炊事場に入れてもらって、食をいただいていたという。当時東本分教会では百数十人が共同生活をしていた。そのときの食をいただいた嬉しさが忘れられず、今も自分で働き、（息子たちは息子の許へ来いというが）その金を教会へ運ぶ七十歳の老婆がいるという。

（『創象』6号.1980.P18）